

近世における京焼と茶碗の動向

— 鳴滝乾山窯跡出土の碗類を中心にして —

鄭 銀珍 (立命館大学大学院文学研究科博士課程後期課程)

E-mail gr011061@ed.ritsumei.ac.jp

要旨

本稿の目的は、おもに鳴滝乾山窯跡の出土品を用いて、乾山焼を近世陶磁史の動向のなかに位置づけることである。江戸時代中ごろに茶碗が一般的に小型化するが、乾山焼もそのような特徴を備えている。しかし同時に重要なことは、尾形乾山深省(以下深省)が、茶碗だけでなく多様な食器類の量産化をめざしていたことである。江戸時代は漆塗りの食器のなかに陶磁器が浸入してくる時代である。乾山焼は、まさにそうした傾向の最先端にあった可能性がある。

abstract

The aim of this paper is to evaluate Kenzan Ware in relation to the ceramic history of the Edo period using the examples excavated from the Narutaki Kenzan Kiln. In the middle of the Edo period, tea bowls generally reduced its size, and Kenzan Ware also has the same aspect. At the same time, it is very important to suggest that Kenzan aimed at mass production of not only tea bowls but diverse types of dishware. In the Edo period, pottery and porcelain began to replace lacquer-coated dishware. Presumably, Kenzan situated on the cutting edge of this trend.

はじめに

近年、近世の陶磁器茶碗に関して、その小型化の問題が研究者のあいだで繰り返し議論されている。おおよそ17世紀末から18世紀前半ごろに一つの転換点があり、茶碗が小型化するという。その理由として、喫茶習慣の変化が指摘されている。抹茶碗のような大きな茶碗を必要としない新しいお茶の飲み方、つまり煎じ茶の流行が関係しているというのである。そしてもう一点、近世陶磁器茶碗の小型化のなかで京焼が主導的な役割を果していることが、注目されている。

本稿は、こうした陶磁器碗の変化の問題を、鳴滝乾山窯跡(1699～1712)出土品を中心とした京焼研究の立場から再検討するものである。鳴滝乾山窯跡出土品は、法蔵寺鳴滝乾山窯跡発掘調査団が2000年から5ヶ年かけて発掘調査した資料である。調査成果の概要は立命館大学2005に、出土資料の一部は木

立・鄭2007に紹介されている。今回は、出土資料のうち碗類を取り上げるものである。まず第1章で先行研究によりつつ茶碗の小型化について説明したのち、第2章では17世紀末から18世紀初頭の京焼の碗類を、とくに鳴滝乾山窯跡出土品に焦点をあてて整理する。最後に第3章で、鳴滝乾山窯跡出土の碗類を京焼および近世陶磁史のなかに位置づけてみたい。

1 茶碗の小型化について

(1) 消費地遺跡

長佐古真也によれば、近世前期の江戸遺跡から出土する陶器碗は、茶の湯の碗を模倣した大振りのもものが大半を占めていた。ところが18世紀前半を境として碗が小さくなり始めるのだが、それは、以前は煮出した茶を茶筥で点てていたが、点てずにそのま

ま飲む茶へと移行し、茶筌を使う大きな茶碗が不要になったためだと推測する。

また、江戸遺跡で小振りの碗が現れるのは17世紀後葉からだが、それらは京焼と考えられる精緻な作りのものが多いという。さらに18世紀中葉以降の陶器碗は、8～10cmほどの小型の、小杉碗・半球碗・筒状器形が主体となる。また陶器の土瓶が新しく出現し、急速に普及していくとする。そして、京焼は19世紀に入ると瀬戸・美濃の磁器小碗に取って代われ、19世紀半ばになると現在の湯飲みに近い形態が登場するという(長佐古1992・2000)。

一方、鈴木裕子は、江戸遺跡における京焼碗の変遷について、17世紀末から18世紀初頭ごろに口径12～13cmの大振りの碗から10～11cmの口径に定型化し、このような変化は、18世紀前半の京焼と推定される土瓶の出現から見ても、抹茶よりは煎じ茶の嗜好が高まったからだという(鈴木2000)。

京都に関しては、公家町出土の京焼を分析した能芝勉によれば、17世紀後半から18世紀前半にかけて平碗が一回り小型になり、さらに、18世紀前半からは半筒碗(せんじ)、小型碗、小杉碗が見られるようになり、18世紀中ごろからは丸碗も小型化し、これは庶民の「煎じる茶」が普及していく過程を表しているとする(能芝2006・2007)。

さらに、京都および京焼と煎じ茶との関係については荒川正明が、煎じ茶は初期の黄檗宗の隠元をはじめとする渡来僧や和僧たちから普及しはじめたが、黄檗宗と関係のあった深省が当時の抹茶にはなかった半筒形碗と磁胎の水注を煎じ茶の道具として作ったと推定し、また18世紀前半以降に京・信楽や瀬戸・美濃で半筒形茶碗が流行するのは乾山焼の影響だという(荒川2007)。ただし、荒川は茶碗の小型化の問題には触れていない。

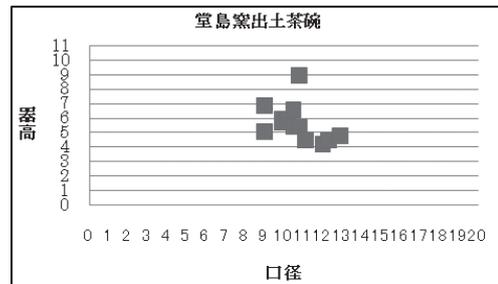
(2) 生産地遺跡

乾山焼と同時期の17世紀末～18世紀初頭に操業したとされる大阪堂島蔵屋敷跡について見てみると、口径9～11cm未満の小型丸碗(8個)、口径11cm以上の平碗(4個)、さらに10.8cmの筒形碗(1個)、土瓶が出土しており、丸碗の小型化がわかる(表1、

表1 大阪堂島蔵屋敷窯の碗の集計
(大阪市文化財協会1999にもとづいて筆者が作表)

器種 分類	遺物 番号	法量(cm)	
		器高	口径
K I (丸碗)	72	6.9	9
	92	5.1	9
	74	6	9.9
	76	5.7	9.9
	75	6	10.2
	73	5.4	10.5
	89	6.6	10.5
	78	5.4	10.8
小計		8	
K II (平碗)	79	4.5	11.1
	82	4.2	12
	91	4.5	12.8
	84	4.8	12.9
小計		4	
K III (筒形碗)	90	9	10.8
小計		1	
合計		13	

グラフ1 大阪堂島蔵屋敷窯の碗の分布(表1によりグラフ化)



グラフ1)。報告書によれば、精緻な作りや文様から碗と土瓶は京焼の系統をつよく引いているという(大阪市文化財協会1999)。

つぎに瀬戸・美濃については、日常什器の需要の高まりと京焼製品の流行に伴い、日常食器の碗、皿類の生産を中心に、京焼写し碗類が主要製品となる。とくに1688～1715年ごろに京焼写しと考えられる腰鍔茶碗と御室茶碗が登場し、18世紀の初頭以降、それが筒状に変化し小型化するという(井上1994)。

肥前では、17世紀の中ごろから京焼風の陶器が生産され(大橋2007)、江戸遺跡出土の鈴木データのデータ(鈴木1999)を整理すると、例は少ないものの肥前京焼風陶器にも小型化した丸碗が見られる。

信楽焼は大きさも含めて京焼を本格的に模しているが、製品の全体組成では碗が大半を占めており、小杉碗と丸碗が小型化しているという(岡2001、畑中2007)。

以上のように、消費地・生産地のいずれにおいても小型化が進行し、そこに京焼の役割を見て取る

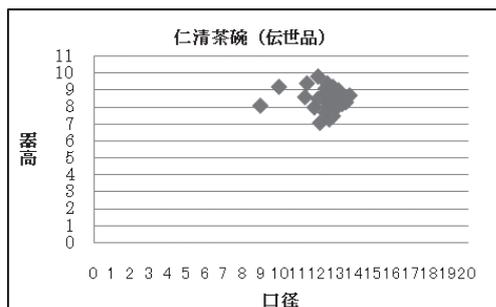
表2 仁清茶碗出土品の集計(鈴木2001にもとづいて筆者が作表)

器種 分類	遺物 番号	法量(cm)	
		器高	口径
K I (丸碗)	7	6	9.9
	8	6	9.9
	10	6.3	10.5
	3	9.6	12.3
	27	7.8	12.6
小計		6	
K II (平碗)	6	4.8	13.8
	17	4.5	13.8
小計		2	
合計		8	

表3 仁清茶碗伝世品の集計
(根津美術館 2004 にもとづいて筆者が作表)

番号	型式	法量(cm)			備考
		高	口径	高台径	
1	K I (丸碗)	8	11.8	4.9	
2		9.8	12	5.7	呉器手
3		7.1	12.1	4.8	
4		8.7	12.3	4.9	呉器手
5		8.6	12.4	5.2	呉器手
6		9.1	12.4	5	
7		7.7	12.4	4.5	
8		8.6	12.4	4	
9		8.5	12.4	4.5	
10		8.5	12.5	5.2	呉器手
11		9.4	12.5	4.7	呉器手
12		8.5	12.5	4.8	呉器手
13		8.3	12.5	4.8	
14		8	12.5	5	
15		7.3	12.6	4.8	
16		8.3	12.6	5	
17		8.8	12.6	5.2	呉器手
18		8.8	12.7	5.2	呉器手
19		8.3	12.7	4.5	
20		8.4	12.7	5.8	呉器手
21		9.2	12.8	4.7	
22		7.5	12.8	4.9	
23		8.2	12.8	4.8	
24		8.1	12.9	4.9	
25		8.5	13	5.2	
26		8.1	13.1	4.4	
27		9	13.1	5.5	
28		8.2	13.3	4.1	
29		8.6	13.4	4.8	
30		8.3	13.5	4.9	
31		8.7	13.7	5.7	呉器手
32	K III (筒形 碗)	8.1	8.9	4.9	
33		9.2	9.9	4.9	
34		8.6	11.3	4.3	
35		9.4	11.4	5.9	
36		8.5	12	4.5	

グラフ2 仁清茶碗伝世品の分布(表3によりグラフ化)



ことができる。また、現段階では推測というべきだが、その背景にお茶の飲み方の変化があると想定している研究者が多い(長佐古 2000、能芝 2007、鈴木 2000 など)。

2 京焼茶碗の量産化と小型化

それでは、小型化を主導したという「京焼」とは何か。18世紀初頭の京焼窯場の記録『京都御役所向大概覚書』によれば、当時、楽焼、粟田口焼、清水焼、乾山焼の四つの窯場があったという(岡 2006)。ただし仁清、乾山焼以外の当時の京焼は「古清水」と総称されるのみで、17世紀末から18世紀初頭もしくは前半ごろの京焼に関して確かな資料を提供できるのは、現在のところ仁清と乾山焼のみである。以下、これらふたつの窯について、碗をめぐるその特徴を整理する。

なお、法量については長佐古、鈴木を参考にしつつ器高および高麗茶碗模倣品の大きさを加味して、大型(口径13cm以上、器高7cm以上)、中型(口径13cm未満～11cm、器高6cm前後)、小型(口径11cm未満、器高5～6cm)とする(長佐古 1992、鈴木 2000)。

(1) 仁清茶碗の分析

仁清については、まず茶碗の量産化を指摘することができる。御室窯跡採集品を用いて分析を行った赤沼多佳によれば、その陶片はほとんどが高麗茶碗のなかの伊羅保や呉器写し、また天目茶碗の量産品であり、それら量産品によって経済的に窯を支えていたとする(赤沼 1999)。また、全国の消費地遺跡から出土した仁清の遺物を検討した鈴木裕子も、仁清の器種は碗が大半を占めるという(鈴木 2001)。

茶碗の大きさについては、同じく鈴木データの整理すると、口径11cm未満の小型丸碗は3個、口径13cm未満の中型丸碗は3個、平碗は13cm以上の大型平碗が2個である(表2)。検討できる個数はわずかだが、小型碗が一定程度存在するものの、少ない。一方、仁清茶碗の伝世品を分析して見ると、仁清は丸碗をたくさん作ったが、全体的に器高が高く、大型と中型が中心で、小型碗はMOA美術館所蔵の筒

形茶碗2点のみである(表3、グラフ2)。つまり、出土品と同じように、伝世品でも小型碗は少ない。したがって、遺跡出土品からは丸碗にある程度小型化の傾向を見て取ることができるが、仁清の茶碗制作の中心的な傾向ではなかったと思われる。むしろ、グラフ2に見るように、口径12～13.5cm、器高8～9cmに分布が集中していることから、中型・大型を中心にしていたことが窺われる。またその法量に同じサイズが多く、規格性が見られる。

(2) 乾山焼茶碗の分析

鳴滝窯跡の出土品のうち、出土量がもっとも多いのは茶碗の陶片で、186片である。単純に破片数で見れば角皿片も多いが、個体数で見れば茶碗のほうが多い。ただし高台のみのものも多く、中には鉢や皿などが混じっている可能性もある。以下では出来る限り茶碗であると思われるものを中心に分析を進める。

表4 鳴滝乾山焼茶碗出土品の型式分類と集計

型式分類	器形	法量				合計
		大	中	小	不明	
K I 型式 (丸碗形)	K I-1	1	6	1	0	8
	K I-2	0	7	11	19	37
	K I-3	0	4	2	2	8
	K I-4	0	1	0	3	4
小計		1	18	14	24	57
K II 型式 (平碗形)	K II-1	3	0	0	4	7
	K II-2	1	1	0	5	7
	K II-3	3	1	0	0	4
小計		7	2	0	9	18
K III 型式 (筒碗形)	K III-1	0	3	4	12	19
	K III-2	0	0	3	7	10
	K III	0	0	0	1	1
小計		0	3	7	20	30
K IV 型式 (小杉碗形)	K IV-1	0	0	1	0	1
胴部(K I 型か、K II 型)						7
高台						73
合計						186

碗の形態は、主として丸碗形・平碗形・筒碗形・小杉碗形の4種類が確認され、便宜的にこれらを順にK I 型式、K II 型式、K III 型式、K IV 型式とし、その概略について記述する(表4を参照のこと)。K I 型式は4種、K II 型式は3種、K III 型式は2種、K IV 型式は1種類が確認される。これら4つの型式の層位学的位置づけについては、出土状況などからは判断がむずかしい。

また、出土品総186片のうち、器高や口径の推定できる陶片は53片で、そのデータにより分析を行う。その集計は表5である。そして、高さが推定できる陶片は39片あるが、そのうち、高台のない破片の器

表5 鳴滝乾山焼茶碗出土品の集計

No.	遺物No.	型式分類	型式	法量			
				高	口径	高台径	大中小
1	5		K I-1	6.1	11.2	4.4	中
2	21		K I-1	5.8	12.6	5.2	中
3	133		K I-1	?	11.8	?	中
4	36		K I-1	5.5	11.5	?	中
5	98		K I-1	6	12.4	?	中
6	141		K I-1	6	11.5	?	中
7	23		K I-1	7	13.7	5.2	大
8	30		K I-1	?	10.4	?	小
9	6		K I-2	5.7	10.6	4	小
10	12		K I-2	?	9.8	?	小
11	29		K I-2	5	8.2	?	小
12	159		K I-2	5	9.4	?	小
13	51		K I-2	6	10	?	小
14	34		K I-2	?	9.5	?	小
15	160		K I-2	?	10	?	小
16	13		K I-2	7.5	11	?	中
17	76		K I-2	?	11	?	中
18	52		K I-2	6	10	3.5	小
19	79		K I-2	?	10	?	小
20	132		K I-2	?	9	4.4	小
21	37		K I-2	6.5	11.4	?	中
22	2		K I-2	6.9	12.6	5.8	中
23	3		K I-2	6	12.6	?	中
24	27		K I-2	6.5	12	4.8	中
25	53		K I-2	6.1	12.5	7.2	中
26	20		K I-2	6.5	10.6	?	中
27	7		K I-3	7.5	11.8	?	小
28	8		K I-3	6	11.4	?	中
29	15		K I-3	6.5	10.2	?	小
30	25		K I-3	8	11.2	5.8	中
31	35		K I-3	6	9.5	?	小
32	70		K I-3	?	12.2	?	中
33	45		K I-4	7.5	12.5	4.4	中
34	24		K II-1	5.1	13.5	4.5	大
35	139		K II-1	?	15.4	?	大
36	38		K II-1	?	19	?	大
37	134		K II-2	?	13	?	大
38	55		K II-2	5.2	12.5	5.6	中
39	11		K II-3	6	16.8	?	大
40	48		K II-3	5.1	13.9	5.4	大
41	49		K II-3	5.5	12.4	?	中
42	50		K II-3	5.9	14.6	5.2	大
43	9		K III-1	7.9	11.2	5.8	中
44	10		K III-1	7.5	9	?	小
45	17		K III-1	6.2	11	5.7	中
46	18		K III-1	7.5	8.9	5.7	小
47	19		K III-1	7.5	11.5	?	中
48	147		K III-1	?	8.6	?	小
49	44		K III-1	?	8	?	小
50	1		K III-2	8	10	?	小
51	14		K III-2	7.5	9.6	?	小
52	16		K III-2	7.7	8.8	4.5	小
53	40	K IV	K IV-1	6.5	10.3	?	小

高は、胴部が高台脇まで残存するものに限って、仮に1.5cmを足した推定高を採用した。乾山焼陶片は通常、高台脇から高台下端までの高さが1.5cmを超えることがないためである。

① K I 型式 (丸碗形)

腰部と胴部が丸みを帯びる。口縁の形状によって3つの種類に分けられ(1～3型式)、さらに、口縁は欠けているが、高台が呉器写しとなっているものがある(4型式)(図1～図4)。

個数は1型式が8個、2型式が37個、3型式が8個、4型式が4個の計57個である。大きさ別では、大型が1個のみに対して、中型18個、小型14個、不明24個となり全体として小型の方向に傾きつつも、確認できる実数としては中型が多い。

1型式は、灰釉の無文の碗であり(図1-5、21)、見込みに目跡があり重ね焼きをした量産品であることがわかる。本資料ではないが、同種の高台の資料が三重・石水博物館にあり、そこには刻印の乾山銘がある。

突出して数量の多い2型式の37個のうち23個は、注目すべき陶片である。これらは、高火度焼成の薄手丸碗で、鏤絵・染付・白泥などによって文様が施されている。その文様は、簡略化された手書きや型紙を用いた絵付けとなっており、器壁がほとんど0.2cmで非常に薄く成形されている。口径の復元できたものに8.2cmと9.4cmがある(図2-29、159)。これら薄手茶碗の23個は、その共通点からすべて同様の小型と考えられ、茶碗全体のなかでもっとも多い数量を占める。この点を考慮すれば、K I 型式 (丸碗形) は小型化の傾向を見せていると考えてよいだろう。

なお、これら2型式の薄手小型碗は、型紙による施文方法、統一された器形や器壁、作行の類似などから、一定の需要に対応しようとしたものと思われる。つまり、素焼き以前の段階ですでにデザインが決まっていたことが窺える。鳴滝出土陶片の中で文様が施される素地片は、白化粧を施した素焼き片、白化粧のない素焼き片、無文の灰釉本焼片に分かれている。白化粧を下地にした器形は、碗の全体の中でK I の2型式と3型式にのみ見られるのが特徴だが、伝世品には見られない種類のものである。こ

れはこのグループのものが、選び出されて後世にまで伝わるようなものではなかったこと、すなわち普段使いの器だったことを意味しているように思われる。なお、2型式には、図2-52のような半球形丸碗や、図2-3、12、53の低火度焼成品があり、さらに図2-132のように磁器土を用いて低火度焼成した小型丸碗も見られる。

また、3型式の端反り碗や、4型式の呉器風の碗も、乾山焼の伝世品に存在しない形である。

② K II 型式 (平碗形)

K I 型式に類似するが、それよりは器高が低くなっている。同じく口縁の形状によって3つの種類に分けられる(1～3型式)(図5～図7)。そのうち3型式は、1・2型式とは作風が明らかに異なり、やや粗い胎土の上から失透性の灰釉系の釉が掛けられ、伊羅保など高麗茶碗を意識したものと思われる。また、2型式はすべて低火度焼成の製品であると思われる。携帯用蛍光X線分析により鉛が検出されたが、鉛が検出されないものもある。京都市産業技術研究所の横山直範先生のご教示によれば、低い温度でも釉薬が溶けるように鉛の代わりにほう砂を入れる場合もあるという。実際に深省著『陶工必用』に釉薬ではないが、錦手の絵具の処方にはほう砂を用いていると記述されている。2型式は、全体の形状は分からないものの、胎土や器形が共通しており、高火度焼成より比較的容易な低火度焼成による平碗が一定量あったことが窺える。

個数は1型式が7個、2型式が7個、3型式が4個の計18個である。大きさを見てみると、1型式は大3個、2型式は大1個、中1個で、3型式は大3個、中1個で、その他の9個はすべて不明である。全体として大型が中心となっているが、1型式には鉢を含む可能性がある(図5-38、140、196)。

とくに、高麗茶碗に倣ったと思われる3型式の場合は、本来の高麗茶碗が大型であったことを忠実に真似ているのだろう。

③ K III 型式 (筒形碗)

半筒形碗もここに含める。胴部が腰部から直線的にまっすぐ立ち上がるか、それとも丸みをもって立

ち上がるかによって、2種に分かれる(1、2型式)(図8、9)。個数は1型式が19個、2型式が10個、1か2型式か区別できないのが1個で計30個である。大きさ別では、1型式は中3個、小4個、12個は不明、2型式は小3個、不明が7個で、全体として小型が中心となっている。筒形碗には有名な雲堂手写し(図8-10)など、伝世品が少なくない。陶片が細かいため、全体の形状は分からないが、総30個という数字は出土陶片の中でも一定量を占めており、様々な形の筒形碗が制作されたことが分かる。その中で低火度焼成品は、図8-9、44がある。

口径の復元できる陶片が少ないものの、小型化傾向にあった筒形茶碗が、鳴滝窯で重要な位置を占めていたことが窺われる。

④ K IV型式(小杉碗形)

胴部は小杉碗のように直線的に開く。口径10.3cm、器高6.5cmの小型1点のみである(1型式)(図10)。このような小杉形碗は、18世紀前半に現れ、中葉にこれを模した信楽・瀬戸美濃製品が急増しており、煎じ茶碗として使われたと言われる(長佐古2000)。

⑤ 胴部

胴部だけの陶片が7点ある。これらは筒碗ではないが、丸碗か平碗かの区別は難しい。そこで、集計上、「丸碗もしくは平碗」として処理するに止める。

⑥ 高台片

碗だと判断できる高台片、すなわち腰に丸みを持って胴部が立ち上がっているもののみを扱う。これらはいずれも丸碗(K I)か平碗(K II)だと思われるが、判断はむずかしい(図11)。そこで、高台片は別個に検討することにした。

高台片のみのもも含め、碗全体で高台径が分かるのは総102片である(表7)。その高台径は3.3～8.8cm前後で大きささまざまであるが、高台径によって口径の大小を推測することはできない。ただし、統計的にある傾向を見てとることはできる。乾山焼の伝世品の茶碗を分析すると、高台径は4.5～8.8cmまであり(表6)、分布は、4.8、5.1～5.3、5.6cmにピークが見られる(グラフ3)。

グラフ3 乾山焼茶碗伝世品の高台の分布(表6によりグラフ化)

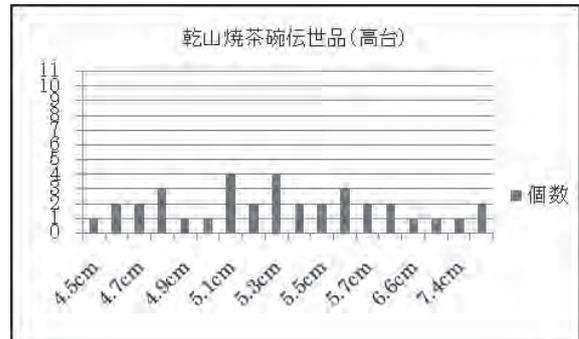


表7 鳴滝乾山焼茶碗出土品の高台集計

高台径	個数
3.3cm	1
3.4cm	3
3.5cm	1
4cm	4
4.2cm	1
4.4cm	8
4.5cm	2
4.6cm	6
4.8cm	8
4.9cm	1
5cm	5
5.2cm	11
5.4cm	6
5.6cm	5
5.7cm	2
5.8cm	5
6cm	5
6.2cm	1
6.4cm	3
6.6cm	2
6.8cm	3
7cm	4
7.2cm	2
7.4cm	4
7.6cm	2
7.8cm	2
8.4cm	2
8.6cm	1
8.8cm	2
合計	102

表6 乾山焼茶碗伝世品の高台集計

No.	高台径(cm)	個数
1	4.5cm	1
2	4.6cm	2
3	4.7cm	2
4	4.8cm	3
5	4.9cm	1
6	5cm	1
7	5.1cm	4
8	5.2cm	2
9	5.3cm	4
10	5.4cm	2
11	5.5cm	2
12	5.6cm	3
13	5.7cm	2
14	5.8cm	2
15	6.6cm	1
16	7.2cm	1
17	7.4cm	1
18	8.8cm	2
計		36

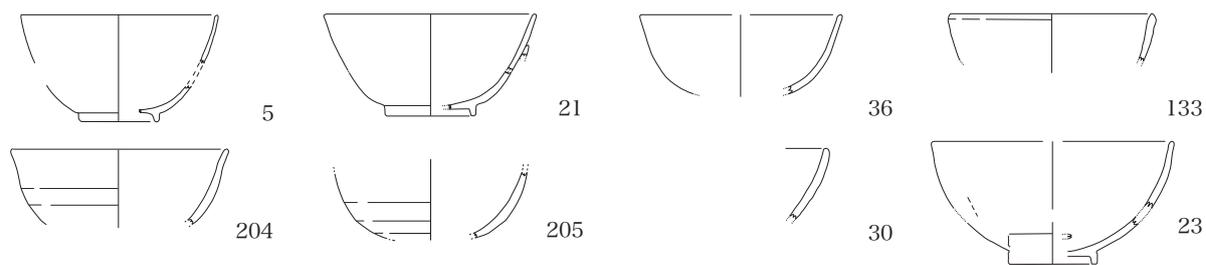


図1 丸碗 KI-1型式

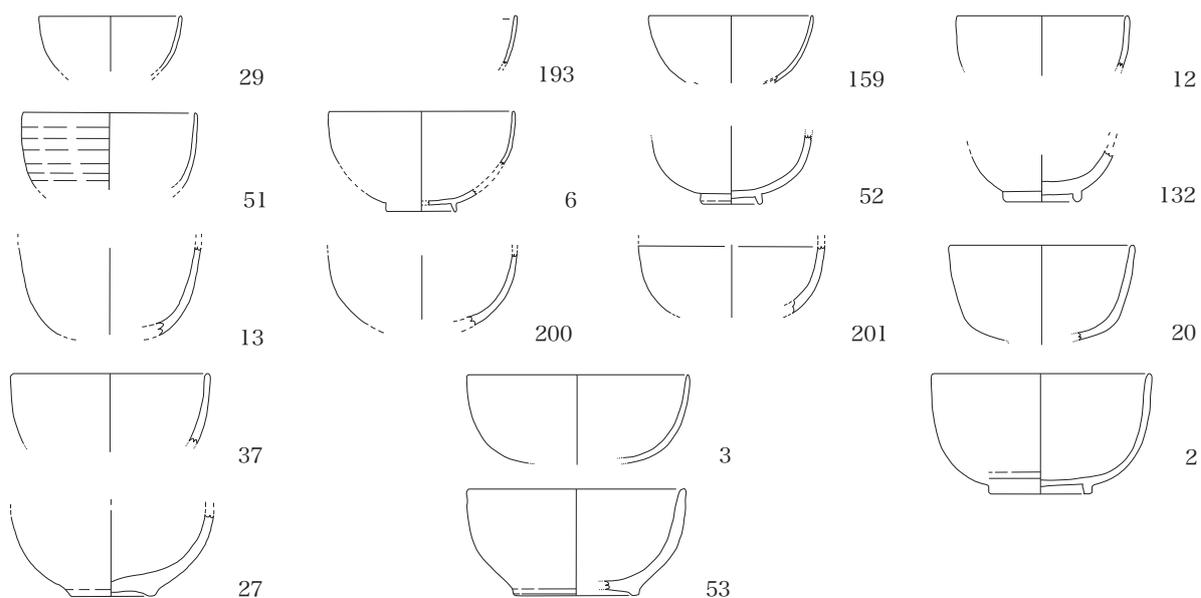


図2 丸碗 KI-2型式

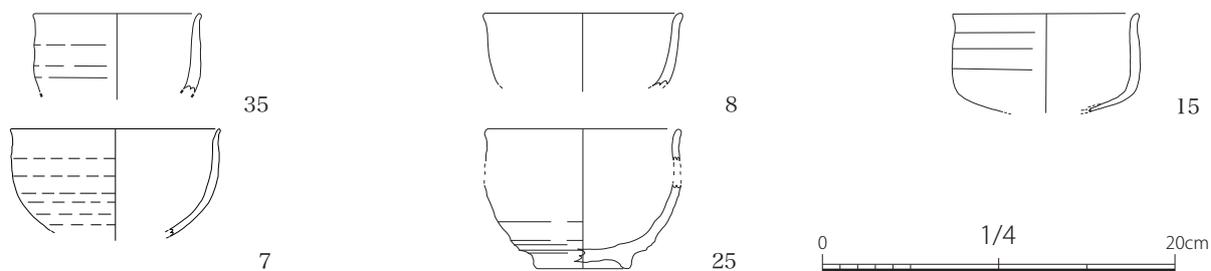


図3 丸碗 KI-3型式



図4 丸碗 KI-4型式

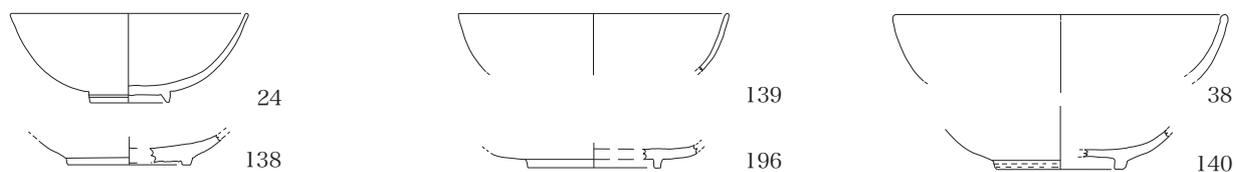


図5 平碗 KII-1型式

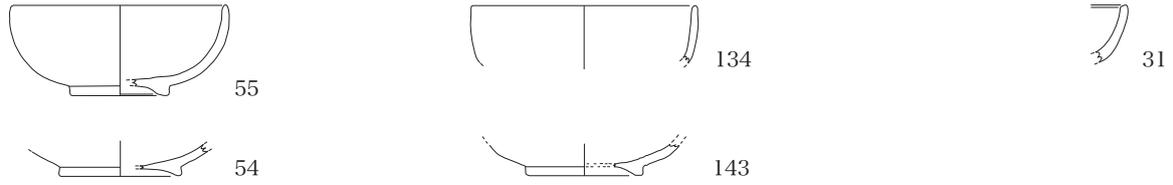


図6 平碗 KII-2型式

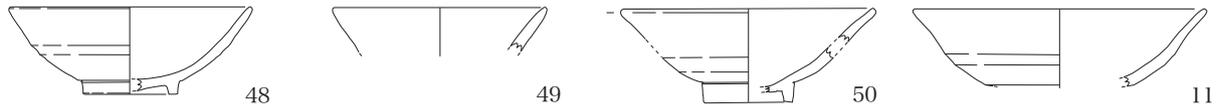


図7 平碗 KII-3型式

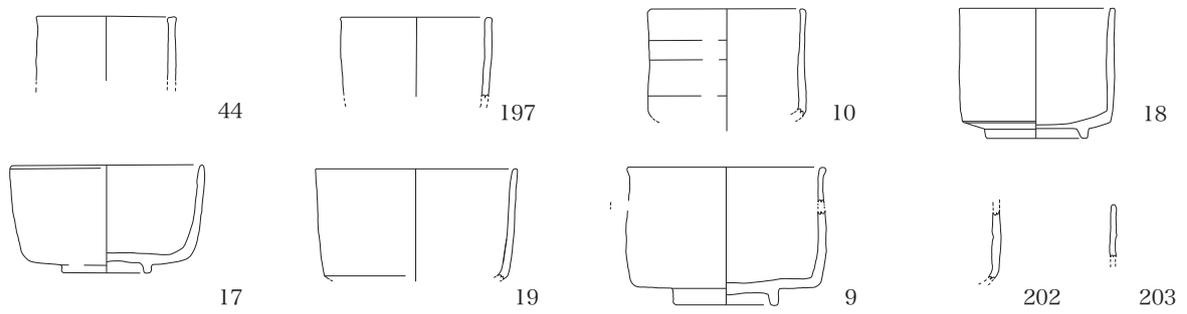


図8 筒形碗 KIII-1型式

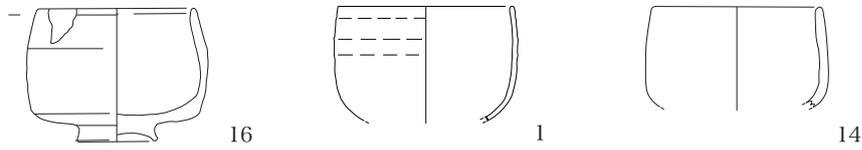


図9 筒形碗 KIII-2型式

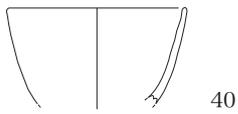


図 10 小杉碗 KIV-1型式

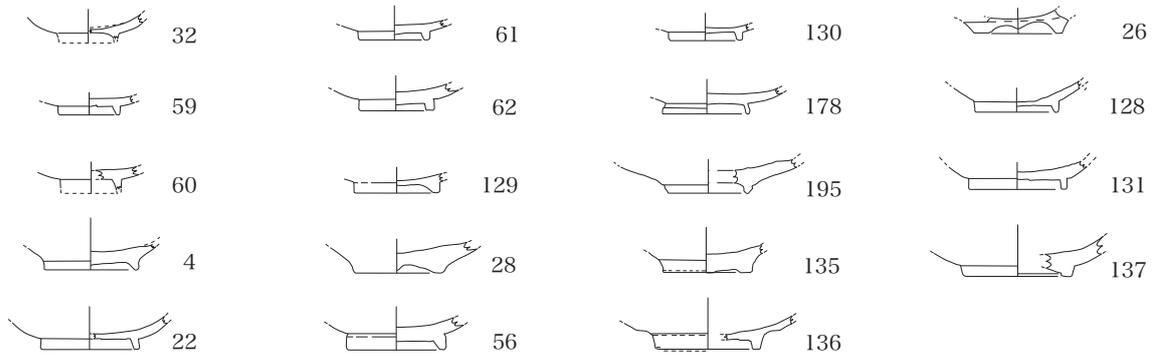
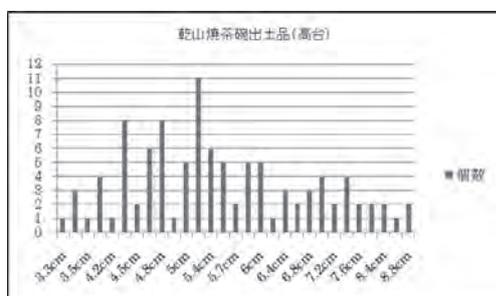


図 11 高台片

また出土高台陶片は、4.4、4.6、4.8、5.2、5.4、にピークが見られる(グラフ4)。ピークの現れ方を見ると、伝世品と出土品の高台径の分布状況は概ね似通っているが、出土品の方がより多様であり、ことに6～9cm以下のものが伝世品には少ないのに比べ、陶片には33点もあるのが特徴である。これらは伝世品から見る限り、銹絵染付菊図向付(MIHO 美術館蔵)のような数物の平碗であると推測される。また、出土品の高台径3.4～4.2cmのものには、高台内に刻印の乾山銘が施されており、これらは残片からK I 型式の丸碗の高台片だと思われるが、この陶片も少なからず出土している。

グラフ4 鳴滝乾山焼茶碗出土品の高台の分布(表7によりグラフ化)

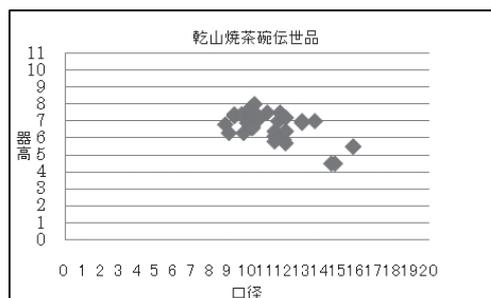


以上から次のようなことが分かる。

- ・乾山焼も、仁清と同じく茶碗を大量生産しており、伝世品にはまれである低火度焼成の碗が一定量含まれていること。
- ・仁清と同じ器種としては、筒形碗、高麗茶碗写し、丸碗(大、小)を作ったこと。ただし、仁清には筒形碗は数個しか伝世していないが、乾山焼は非常に多く伝世し、鳴滝からも陶片が30点出土している。
- ・新たな器種としては、小型の筒形碗、半球形の小丸碗、口径に比して器高の低い碗、小杉碗などがあること。
- ・伝世品からみても、仁清は丸碗をたくさん作ったが10cm以下のものはなく、それに対して乾山焼は小型化の傾向を示していること。

ここで、口径の統計を使用して、さらに比較してみたい。グラフ2の仁清茶碗伝世品は、分布が口径12～13.5cmあたりに集中する傾向が見られる。一方、グラフ5の乾山焼茶碗伝世品は、口径9～11cm未満と口径11～13cmのふたつのグループがあり、仁清に比べ、小型化を示す部分が顕著に現れている。さらに器高を比べると、仁清が8～9cmに集中するのに

グラフ5 乾山焼茶碗伝世品の分布(表8によりグラフ化)



グラフ6 鳴滝乾山焼茶碗出土品の分布(表5によりグラフ化)

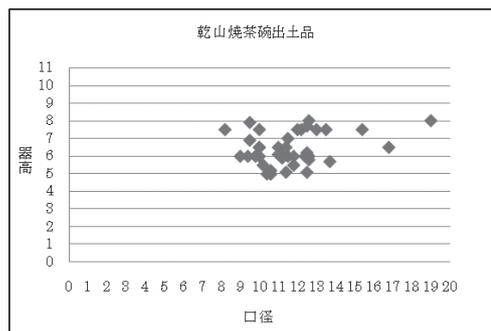


表8 乾山焼茶碗伝世品の集計

番号	型式	法量(cm)		
		器高	口径	高台径
1	K I (丸碗)	6.1	11.5	?
2		6.4	11.5	5.1
3		7	11.7	4.5
4		7.5	11.8	5.2
5		5.9	12	5.7
6		5.7	12.1	5.8
7		7.2	12.1	5.3
8		6.4	12.1	5.6
9		7.2	12.1	5.3
10		6.4	12.1	5.6
11		7	13	5
12		6.9	13	5.1
13		7	13.7	5.7
14	K II (平碗)	5.8	11.5	5.3
15		4.5	14.6	7.2
16		4.5	14.8	7.4
17		5.5	15.8	8.8
18		5.5	15.8	8.8
19	K III (筒形碗)	6.8	8.8	4.7
20		6.3	9	5.8
21		7.4	9.3	5.6
22		7.3	9.3	5.5
23		7.3	9.3	4.7
24		7.4	9.7	4.6
25		6.3	9.8	4.9
26		6.9	10	5.1
27		6.9	10.1	4.8
28		7.3	10.2	5.3
29		7.4	10.2	6.6
30		6.6	10.2	5.2
31		7.8	10.2	5.4
32		6.7	10.3	4.8
33		6.6	10.3	5.1
34	7.6	10.3	4.8	
35	8	10.4	5.4	
36	7.2	10.7	4.6	
37	7.5	11.1	5.5	

対して、乾山焼は6～8cmである。グラフ6の乾山焼茶碗出土品では、小型と中型の二つのパターンがさらに顕著化している。基本的な傾向は伝世品と似ているが、器高5～6cm、口径9～13cmの、口径に比べ器高の低い碗が多いことに気付く。つまり、仁清は器高が8～9cm、口径12～13.5cmの一つの商品に向けられているが、乾山焼茶碗には、法量だけでも大きく4つのパターンが見られる。a. 器高6～8cm、口径8～10cm b. 器高6～8cm、口径11～13cm c. 器高5～6cm、口径9～13cm d. 器高6.5～8cm、口径15～19cmの碗である。ただし、dは本論では平碗としているが、鉢の可能性もある。

3 乾山焼の茶碗の位置づけ

まず、茶碗の量産をめぐる大きな状況を見ておく。岡佳子は、京都金閣寺の住職・鳳林承章の『隔莫記』を通して肥前陶磁の受容動向を検討し、慶安年間(1648～52)を境として伊万里焼の現れ方が異なるという。それまでは一点単位で記載されていたのが、この時期以降、10個組を単位として茶碗や皿が増加し、それは歳暮等に茶碗を贈ることが流行したためであり、10個単位の伊万里焼が贈答品のトップに躍り出たのだという(岡2004)。そもそも江戸時代初期(17世紀)においては、京都、江戸のいずれの消費地遺跡においても肥前磁器が圧倒的な出土量を占める。『隔莫記』からは、そこへさらに肥前茶碗の流行が重なっていったことが分かる。

ところが18世紀に入ると、京都公家屋敷の場合、肥前の産地組成比率が下がり、京焼の組成比が増え、とくに陶器類は、18世紀後半には京・信楽系が主流となる(能芝2004・2006)。また東京大学構内出土の陶磁碗の場合も、18世紀初めから、京・信楽陶器碗の占める割合が大幅に増加してくるという(大成2000)。さらに鈴木は、17世紀末から18世紀初頭にかけて「仁清」「清水」「清閑寺」「粟田口」などの印銘を持つ京焼の出土量が増加し、丸碗・平碗を中心とする碗がその大部分を占めるが、その形状や文様は似通っており、これらの多くは重ね焼きをした量産品であるとする(鈴木1999)。

御室窯が操業していたのが17世紀後半、乾山焼は17世紀末から18世紀前半である。以上の出土状況から、仁清、乾山焼をはじめとする京焼系の茶碗が、この時期、肥前に対して巻き返しを図りつつある状況が窺える。その際、肥前に対抗するには一点物ではなく、必然的にある程度の数量が必要であった。仁清や乾山焼の数物生産には、このような背景が考えられる。

そして、小型化については、すでに述べたように、乾山焼と同時期に操業していた大阪の堂島窯跡から、小型の丸碗とともに土瓶も出土し、煎じ茶との関連を思わせる。ここで注目すべきは、鳴滝窯跡からも土瓶の注口部だと思われる素焼き片が1点出土していることである(写真1)。胴部や、蓋だと思われるものもあり(写真2、3)、全体の形状は不明だが、注口部が「S」字形を描き、伝世品によくある小型の汁注ではなく、また半陶半磁胎の大型品でもない、陶質製になるものである。鈴木によれば土瓶の初見は18世紀前葉で、注口部が「S」字形を描き、産地は京焼だという。さらに、この土瓶は碗と同じ生産地で制作され、こうした喫茶道具は京焼が早く生産したとする(鈴木2000)。そうしたことを考慮すれば、京焼の一つである乾山窯で小型の丸茶碗とともに土瓶が制作された可能性が考えられる。従来、口径10cm以下の小型丸碗、とりわけ端反形丸碗、土瓶は乾山焼の伝世品に存在せず、また、乾山焼以前、少なくとも仁清までは余り見られなかった形状・法量の碗で、これらは、新たな乾山焼作陶の様相を垣間見せるものである。



写真1 土瓶の注ぎ口



写真2 土瓶の胴部



写真3 土瓶の蓋

だが、これらの鳴滝窯跡出土品を煎じ茶や煎茶と関連付けて理解してよいかどうかは、即断できない。むしろ注意すべきは、小型化をも含めた、碗の多様化とも呼ぶべきものである。たとえば竹内順一は、胴部がわずかに内側に曲線を描く乾山焼の筒形茶碗は従来茶の湯にはなかった形で、茶碗の多様化にあたえた影響が大きいとする(竹内 2002)。また 1720 年頃からの江戸遺跡出土の筒形茶碗には「乾山風の文様が描かれ」(鈴木 1999)、18 世紀に入ると「半筒状の特徴的な器形の碗が流行する」という(長佐古 1994)。つまり、筒形茶碗の流行は、乾山焼がきっかけになっていたことも想定でき、これは、茶碗の多様化において乾山焼の果たした役割の一例となる。

それでは、中型の丸碗や平碗はどのように理解すべきか。岡佳子によれば宝永 7 年(1710)の清水寺「音信帳」の記録には、各所への贈り物として、「平茶碗」「金茶碗」「祝茶碗」「大福茶碗」などが記載されているという。さまざまな様式、目的をもった茶碗があったことが分かるが、さらに『宗和茶湯書』に「御室焼の吸物茶碗」がみられ、茶碗には、上質、数物の抹茶碗、懐石具としての碗類など、様々な用途があり、18 世紀にいたると京焼はさまざまな種類の碗を生産する茶碗窯へと展開したものとする(岡 2000)。

つまり、高級料理屋が登場し関連遺物の増加を見るのが 17 世紀後半だとすれば(原田 2009)、懐石具や食器としての用途も考えることができるわけである。実際、17 世紀後半の公家町遺跡からは、同一器形、同一文様の碗や皿などが 10 個体、20 個体の単位で出土しており、食器類に各種の数揃いものが多いことが特徴となっている(京都市埋蔵文化財研究所 2004)。また、長佐古は、江戸遺跡から出土した大量の陶磁器碗の中で食器として用いられた可能性のある碗は、直径 10～14cm ほどの中法量の浅めの碗で、磁器を主体とし、蓋が伴う事例が多いとする(長佐古 2001・2002)。そして食器としての陶磁器「碗」は 17 世紀初頭ではほとんど用いられておらず、17 世紀中頃に出現し、17 世紀後半以降になると、出土遺物に一定の頻度が見られるようになるという(ただし、普及するのは幕末から。長佐古 2001)。さらに、中井さやかによれば、近世には漆器碗そのものも小

型化する傾向にあるというが(中井 2001)、具体的なデータをともなった研究はないようである。また、後藤宏樹も、17 世紀初頭では磁器碗よりも漆器碗が高い割合にあったと推測する(後藤 2001)。このように江戸時代初めは、食器の主体は漆器であったが、18 世紀以降になると、徐々に陶磁器碗の占める割合が高くなり、昭和までに陶磁器飯碗と漆器汁椀という組み合わせが出来上がったという(後藤 2001)。

つまり、仁清よりも多様なバリエーションを持っていた乾山焼の時代は、漆器を中心とした食器のなかに次第に陶磁器が浸入し始める時代だったといえよう。乾山焼はその先端に立っていたのではないかと思われる。

乾山焼の伝世品の茶碗の中には大型の丸碗や中型の丸碗に蓋茶碗が多く、また鳴滝窯からも蓋が多く出土している。蓋付きの丸碗は、漆器の碗類を写した可能性が高い。ひるがえって鳴滝窯跡から出土する器種構成を見てみると、中・小形の皿(向付)、鉢(磁胎もあり)、汁注、小形水注など、さまざまな陶磁製食器類が見られ、さらにこれらは一点ものではなく、同じ形状のものが数物として制作されている。小型碗や、中型の丸碗、平碗なども、まずはやきものこうした多様化のなかに位置づけるべきものだろう。伝世品でみられる向付と称される一連の多くの碗類の数ものは、二条丁子屋町時代のものとされているが、鳴滝時代にすでにこうした傾向があったことが出土品から窺える。

4 おわりに

従来の研究では、17 世紀末から 18 世紀前半ごろに碗が小型化し、そのなかで京焼が主導的な役割を果たしていたという。鳴滝乾山窯出土の茶碗を実際に検討して見ると、全体として確かに小型化の傾向にある。それは形としては丸碗と筒形碗である。従来の研究が近世における碗の小型化と京焼を関連づけていたことは、鳴滝乾山窯跡出土の茶碗陶片でも確認できると考えてよいだろう。

ただし、鳴滝乾山窯跡出土の茶碗は基本的には中型のものも多く、抹茶茶碗だけでなく、漆器碗の代

わりの飯碗や吸い物碗などとして生産された可能性が考えられる。陶磁製の蓋の存在もそれを裏付ける。また、公家町出土の数揃い物をも考慮すれば、市場の流行を強く認識して積極的に量産化に取り組んでいたと推測できる。つまり、乾山焼には仁清よりもさらに近世的な茶碗の動向を見て取ることができる。近世における漆器碗から陶磁器碗への移り変わり、さらには陶磁製食器の多様化と量産化のなかに身を置いているのであり、碗の小型化とともに、これらを乾山焼の重要な側面として指摘することができる。

また、乾山焼伝世品の茶碗には低火度焼成品が少ないが、今回の整理で出土品には一定量の低火度焼成品の茶碗が含まれていることが分かった。さらに鳴滝乾山窯跡の出土片は素焼が圧倒的に多く、高火度焼成品は極端に少ない。もちろん、昭和初期の窯跡発見以後、多くの人々が訪れ採集した後の「残りもの」のためなのかも知れない。しかし、鳴滝乾山窯は高火度焼成よりも、低火度焼成の制品に主体をおいていた可能性が考えられる。実際、鳴滝窯跡からは碗以外に鉢、角皿、匏目皿、変形皿、猪口、合子、香合、蓋類など各種の低火度焼成品が出土した(木立・鄭 2007)。晩年の深省が著した『陶工必用』には、低火度焼成は押小路焼の孫兵衛から伝授された技法である、とある。以上、深省は初期京焼である押小路焼の流れを受け継いでいることも、さらに明確になったと思われる。

なお本稿では、鳴滝窯跡出土品の碗類をすべて集計したものであり、貼付け高台の変形皿や皿類と鉢類はできる限り除外した。今後茶碗の陶片が出てきても、破片が小さいため型式分類や法量の推測ができず、全体の結果にはほとんど影響を及ぼさないとと思われる。

〔謝辞〕

低火度焼成と高火度焼成の識別、釉薬と白化粧の識別に当たっては京都市産業技術研究所の横山直範先生にお世話になりました。記して感謝の意を表します。

〔参考引用文献〕

- 赤沼 1999 赤沼多佳「和物茶碗—誕生と好みの変遷」『茶の湯の名碗—和物茶碗—』茶道資料館
- 荒川 2007 荒川正明「雅遊の陶—鳴滝時代の乾山焼を中心として—」『乾山の芸術と光琳』NHK プロモーション
- 井上 1994 井上喜久男「尾張陶磁(4)—江戸中期の瀬戸物編年—」『愛知県陶磁資料館 研究紀要 13』
- 大阪市文化財協会 1999 『大阪市福島区堂島蔵屋敷跡』
- 大橋 2007 大橋康二「日本海地域における肥前陶磁の流通」『研究紀要』第5号 佐賀県立九州陶磁文化館
- 大成 2000 大成可乃「『やきもの』考」『加賀殿再訪東大 大学本郷キャンパスの遺跡』東京大学出版会
- 岡 2000 岡佳子「仁清の茶碗」『茶の湯の名碗—和物茶碗—』茶道資料館
- 2001 「近世京焼の展開—18世紀を中心に—」『近世信楽をめぐって』関西陶磁史研究会
- 2004 「京都における肥前磁器の受容について」『受容層の違いによる九州陶磁の様相』九州近世陶磁学会
- 2006 「17世紀から18世紀前半の京焼—文献と伝世品を中心に—」『京焼の成立と展開—押小路、栗田口、御室』関西陶磁史研究会
- 京都市埋蔵文化財研究所 2004 『平安京左京北辺四坊—第2分冊(公家町)—』
- 木立・鄭 2007 木立雅朗・鄭銀珍「鳴滝乾山窯跡の発掘調査」『乾山の芸術と光琳』NHK プロモーション
- 後藤 2001 後藤宏樹「『食器』としての漆器碗の変遷とその背景」『食器にみる江戸の食生活』江戸遺跡研究会
- 竹内 2002 竹内順一「新乾山考(28)—新しい茶碗の出現」『茶道の研究』545号、茶道之研究社
- 鈴木 1999 鈴木裕子「京焼出土資料の変遷—17・18世紀の江戸を中心に—」『'99徳島城下町研究会発表要旨 京焼—消費地出土の様相』関西近世考古学研究会
- 2000 「江戸と煎茶文化—考古資料から」『シンポジウム「煎茶文化と陶磁器」資料集』愛知県陶

- 磁資料館他
- 2001 「出土資料から見た仁清」『野村美術館 研究紀要』野村美術館
- 中井 2001 中井さやか「漆碗の編年」『江戸考古学研究事典』柏書房
- 長佐古 1992 長佐古真也「茶の湯と喫茶の間で—近世考古学の現状と課題—」『考古学と江戸文化』江戸遺跡研究会第5回大会
- 1994 「江戸の茶碗—考古資料にみる市井の茶—」『月刊歴史手帖』名著出版
- 2000 「日常茶飯事—近世における喫茶習慣素描の試み—」『江戸文化の考古学』吉川弘文館
- 2001 「食膳具と膳1—食器の構成」『江戸考古学研究事典』柏書房
- 2002 「『お茶碗』考」『国立歴史民俗博物館研究報告』第94集
- 根津美術館 2004 『仁清の茶碗』
- 能芝 2004 能芝勉「京都公家屋敷跡出土の肥前系陶磁器について」『受容層の違いによる九州陶磁の様相』九州近世陶磁学会
- 2006 「京都・公家町出土の京焼—17世紀～18世紀前半の様相」『京焼の成立と展開—押小路、栗田口、御室』関西陶磁史研究会
- 2007 「公家町17世紀の茶の湯と煎茶文化—寛文11年火災—括資料を中心に—」関西近世考古学研究会
- 畑中 2007 畑中英二『続・信楽焼の考古学的研究』サンライズ出版
- 原田 2009 原田信男『江戸の食生活』岩波書店
- 立命館大学 2005 立命館大学文学部日本史専攻考古学コース編『鳴滝乾山窯跡 第1～5次発掘調査概報』法蔵寺鳴滝乾山窯跡発掘調査団・立命館大学文学部・立命館大学21世紀COE京都アートエンタテインメント創成研究